

東京白楊だより

第29号
平成18.8.1
(2006年)



白楊ヶ丘同窓会東京支部

旧制函館中学校
函館中部高等学校

ホームページアドレス <http://www.h6.dion.ne.jp/~kanchu/>



旧函館区公会堂

支部長ご挨拶



白楊ヶ丘同窓会東京支部長

金子 公彦

61期(昭和34年卒)

皆さん お変わりなくお元気にお過ごしのことと
拝察致しております。

「何が起きてもおかしくない」と言われて久しい
今日この頃、従来には想像もつかなかった出来事、
即ち、各種偽装事件、企業形態やマネジメントに対
する株主からのもの言い、資本取引に関する新しい
展開、関連して日経平均株価の大幅変動、更には異
常な原油高や、幼い子供をはじめ成人男女・親子の
痛ましい事件の多発、北朝鮮のミサイル発射など、
我が国の経済・社会環境、防衛等に大きく影響を及
ぼす出来事の多さには、いつたい日本は何処へ行く
のかと危惧する次第であります。

しかしながら、東京支部としては嬉しいご報告を
させて頂きます。それは、数年間継続してありまし
た赤字をやっと黒字化することが出来たことです。

私が支部長を拝命し丸三年が経ちましたが、この
黒字化も偏に、役員はじめ各期の評議員の皆様、そ
れに同窓会活動にご協力頂きました皆様の大変なご
尽力の賜と、心より感謝申し上げます。

黒字化達成とは言えまだまだひ弱な状態であり、
一日も早く盤石な態勢を構築しなければならぬ状
況であります。そこで、今まで掲げて参りました各種
施策は継続して執り進めて参りますが、皆様方にお
願いがあります。それは、先ず会費納入者の増大であ
り各期出来ましたら2名の増員を、また、親睦大会に
は少なくとも三百名の参加者を頂きたいと存じます。
更に、ご寄付頂ける方からは理由をご自分で付けて
頂きご協力願いたいと思えます。ポーンが入った、
昇格祝い、結婚25周年記念、宝くじや株で儲かった
等々何でも構いません。ちょっと楽しくありません
か。また、本年は初めての試みとして東京支部主催の
ジャズコンサート(別途ご案内)を開催致します。多
数の皆様方のお越しをお願い致します。ご報告旁々
お願いを含め挨拶にかえさせて頂きます。

二十一世紀の新風となれ

函館中部高等学校校長 古林 由則



はじめに
白楊ヶ丘同窓会東京支部の皆様には、平素より本校に対する暖かいご支援と激励を賜り、心より感謝申し上げます。

★今春の卒業生進路
平成18年度大学入試は少子化の

〈合格者延数〉

区分	平成18年			平成17年			平成16年		
	現役	過年	計	現役	過年	計	現役	過年	計
国立	60	24	84	63	31	94	62	29	91
公立	21	7	28	14	4	18	17	5	22
私立	119	79	198	135	81	216	97	121	218
その他の大学	1	3	4	1	3	4	4	1	5
国立短大	0	0	0	3	2	5	1	2	3
公立短大	7	0	7	6	0	6	5	0	5
私立短大	20	0	20	13	3	16	9	0	9
高等看護学校	14	0	14	12	1	13	13	0	13
計	242	113	355	247	125	372	208	158	366



【入学式】

4月10日、少々肌寒さの残る中、平成18年度入学式が無事行われました。管内・外、44校の中学校から241名の新入生が憧れの函中へ入学しました。式では新入生を代表

★新入生を迎えて

影響を受け、ますます大学の二極化が顕著になっていきます。併せて道内経済の不振もあって、国公立大への進学希望が増えています。本校の国公立大合格者数は例年並みに推移しました。特出は平成14年以来、4年ぶりに現役東大合格が1名、東北大3名、筑波1名、浪人組にも国立大医学部への合格が3名等、大いに健闘しました。一方、私大は受験者数そのものが一昨年の323名が今春には261名と激減しています。この傾向は当分続きそうです。



★SEELHIPプロジェクト
平成十五年度から文科省の指定を受け、「英語でのコミュニケーション能力」の研究開発を実践してきました。その取り組みが全国から高く評価され、今年度から3年

★同窓会新役員

同窓会役員	
顧問	佐々木園子
顧問	鈴木進
顧問	山玉三千城
顧問	小林明子
顧問	後藤幸司
顧問	名取晃一
顧問	瀬川仲夫
顧問	千賀慎一
顧問	他
顧問	(校内同窓生によって構成)

旧制中学五、八〇六名、新制高校二〇、八六七名の学窓がご支援頂く同窓会役員の皆様は次のとおりです。

して安田君が力強く宣誓をしました。

★着任校長奮戦記
4月の赴任以来、函中のあまりの忙しさに閉口している。渡島管内22校(公立)の東ね役として、管内教育推進役や、調整役として八面六臂の立ち回りが求められる。職員スタッフに支えられながらの2ヶ月が何とか無事に推移した。ここだけの話、前任校なら半年分の仕事を一気に消化した感じだ。しかも、昨年は創立110周年記念事業もあつたので、同窓の皆さんは言うに及ばず、富樫前校長はじめ職員の皆さんにはどれほど大変だったか、想像に余りある。伝統校といふのはとにかく歴代諸先輩の想いがこのほかに熱い。その想いを大切にしながら更に新しい潮流を構築する、それが函中に赴任した校長の役どころと心得る。図々しいようだが先輩諸氏のご支援、ご協力、ご助力を切にお願いしたい。

間の継続指定となりました。本校で学んだ生徒がその英語力を駆使して世界に羽ばたくのが大いに、楽しみです。



終わりに
朝、生徒玄関前に立っている。どの生徒も「おはよう」と声をかけてくる。こんな素晴らしい生徒に全力投球したい。

白楊ヶ丘同窓会東京支部 第29回親睦大会報告



“心のオアシス東京支部を活力あ
る集いに”をテーマに、白楊ヶ丘同
窓会東京支部の平成17年度「第29回親
睦大会」が、9月11日(日)午後4時
より、東京・港区南青山の「ホテルフ
ロラシオン青山」で、来賓及び同窓生
など226人が参加して行われた。

理事 菅原大作
65期(昭和38年卒)

大会は、二部構成で行われ、第
一部では、阿部博光氏(第75期・
昭和48年卒業)のフルートコンサ
ートが、第二部では懇親パーティ
とアトラクションとして、「我が青
春を大いに語る」をテーマに、各
期の代表者にそれぞれの高校時代
に戻っていただいていた過ごした学校
生活や事件・風俗などの青春時代
の思い出を語っていただいた。

第一部のフルート奏者の阿部博
光氏は、1976年北海道大学教育大学
を経て東京芸術大学に入学。同年
第45回日本音楽コンクールフル
ート部門入選。1982年文化庁芸術家
外研修員として、スイスに留学。
1988年より東京で10年連続リサイ
タルを開催。日本フィルでは、首席
フルート奏者を務めソリストとし
ても活躍。1998年度札幌市民芸術祭
大賞受賞。2002年札幌文化奨励賞受
賞。現在、北海道教育大学岩見沢
校教授。同札幌校・札幌大谷短期



盛会だった第29回親睦大会

コンサートでは、ジュニ
アの主題による幻想曲、プーラン
クのフルート・ソナタ、ドビュッ
シーのバンの笛、ドップラーのハ
ンガリー田園幻想曲を、博光氏夫
人の阿部佳子さんのピアノ伴奏で
熱演した。この日は、コンサート
の開始直前に、雨傘も役立たない
ほどの猛烈な勢いの突然の夕立に
見舞われたため、参加者の出足が
多少鈍ったもののおよそ120人の聴
衆が軽やかなフルート演奏に酔い
れていた。

大学非常勤講師。HBCジュニ
ア・オーケストラ常任指揮者とし
て活躍されている。
コンサートでは、午後5時
より懇親パーティが開宴された。
司会は、75期の林誠之介氏と赤津
寿々子さんが担当した。宴の前に、
52期以前の旧制卒業生が壇上の上
がって、フルートコンサートでも
演奏された阿部佳子さんのピアノ



金子公彦支部長

続いて、支部長の61期・金子公彦
氏が、今年、母校創立百十周年に
当たる。普通科の公立高校として
は全道最古。同窓生は2.5万人を超
える。私も東京支部にはおよそ
四千人の会員がいる。我々は母校
の伝統を守ってより一層活発化し
たい。また、同窓会活動を通じて函
館を中心とする道南地区の活性化
と発展に貢献したい。皆様方のご





山内隆陽白楊ヶ丘同窓会長

支援、ご協力をお願いしたい。なお、今年は、およそ11年ぶりに東京支部の会員名簿を更新した。作業は、役員の手作りで行った。まだ改善すべき点が多いが、時代にあつた役立つものとして、携帯電話番号やEメールアドレス、出身中学校、趣味、所属部活動などを掲載した。名簿を担当された役員の方々のご努力にこの場を借りて厚く御礼申し上げたい。

本日は、先輩・後輩間の交流や異業種間交流、あるいは趣味その他の話などに花を咲かせていただいで時間の許す限りお楽しみいただきたい」とあいさつした。

この後、来賓として出席された富樫一憲函館中部高等学校長、山内隆陽白楊ヶ丘同窓会長、阿部喜久雄函館市東京事務所長などの方々を紹介した。

来賓を代表して、山内同窓会長が「毎年参加させていただいているが、毎回ユニークな企画で会を



富樫一憲函館中部高等学校長



二上達也顧問(52期・昭和25年卒)

盛り上げられているご努力に感心させられる。これらのイベント企画を、本部同窓会を始め、札幌、宮城支部などの開催時に役立ててもらうために情報発信していきたい。なお、10月15日に創立百周年記念行事として、記念講演会や記念式典、祝賀会が行われる。東京支部からもできるだけ多くの方々のご参加をお願いしたい」とあいさつした。

富樫校長は、「日頃からの東京支部の皆さんの母校へのご支援とご協力に感謝したい。母校を取り巻く現況は、函館地区は道内の中でも、有力私立高校が多く、本校と私学の間で中学生の奪い合いが続く激戦区となっている。しかし、ここ3、4年は受験辞退者や入学辞退者が大幅に減少し、二次募集の必要もなく、優秀な生徒が確保できるようになった。また、学校の活性化のために9人の教職員が異動し、代わって新進気鋭の若手



本庄登志彦(48期・昭和20年卒)



阿部 健(55期・昭和28年卒)

が着任。学校が一層活気づいた。なお、今春の国公立大学には、現浪合わせて120名が合格。合せて難関私大への合格も好調だった」と述べた。

続いて、二上達也白楊ヶ丘同窓会東京支部顧問(元日本将棋連盟会長)のご発声で乾杯をし、懇親パーティーに移った。

会場内には、例年と同様に、函館市東京事務所寄贈の函館の夜景や旧倉庫街の面影を残すベイエリアの風景、元町界隈などの観光ポイントが数多く貼られて、ふるさと・函館の雰囲気を感じさせていた。

懇親会のアトラクションとしては、今回は、本庄登志彦(48期・昭和20年卒)と阿部健(55期・28年卒)、内藤尚(60期・33年卒)、菅原大作(65期・38年卒)、松村敦子(75期・48年卒)、及川博志(98期・平成8年卒)の6氏に、『我が青春時代を大いに語る』と題して、それぞれが過ごした高校



内藤 尚(60期・昭和33年卒)



菅原大作(65期・昭和38年卒)

時代のエピソードや思い出などを披露していただいた。それぞれの方々の年代差が大きく、互いに共通する話題は少なかったものの、新旧校舎の変遷や学生生活の違いなどが浮き彫りにされるなど興味深い話題が多かった。

この後、音音(ねね)の芸名で歌手活動をされている仲谷美波さん(99期・平成9年卒)が、飛び入りで、アカペラでゴスペルを熱唱。盛んな拍手を浴びていた。

今回の大会では、第75期(昭和48年卒)が幹事期として、企画から大会運営までを行ったが、次回の大会を担当する76期の白川正広氏が「今回の大会には、担当期の75期は50人もの方々が参加されて、大会を大いに盛り上げた。来年は、第30回という節目になる。我々76期も諸先輩の方々のアイディアを得て、より良い大会を目指したい」と決意表明した。



松村敦子(75期・昭和48年卒)

そして、最後に、校歌 火柱の



及川博志(98期・平成8年卒)



音音(99期・平成9年卒)

はためく峰も……を全員で合唱。高校時代に思いを馳せ、次回の再会を約束して懇親パーティーを終了した。

なお、参加者には、北海道製菓(本社・函館)より寄贈されたクッキーとカンパセットがお土産としてプレゼントされた。



76期が次回大会へ決意表明

第29回・東京支部親睦大会出席者一覧

(平成17年9月11日・ホテル フロラシオン青山)

- 昭和8年卒(第35期) 佐藤 洋
- 昭和16年卒(第43期) 續 豊・井筒吉彦・神山茂郎
- 昭和18年卒(第45期) 池上謙之助・世良田博夫
- 田沼修二
- 昭和19年卒(第46期) 小笠原敏雄
- 昭和20年卒(第47期) 堀田善和
- 昭和20年卒(第48期) 本庄登志彦・渡辺丞一
- 昭和23・24年卒(第51期) 小野寺吉彦・三國比左男
- 昭和25年卒(第52期) 井上 稔・瀨田松吉昭
- 昭和27年卒(第54期) 長島 康・二上達也・福津達男
- 昭和28年卒(第55期) 阿部 健・栗崎健一・香西 慧
- 神田夏枝(木村)
- 昭和29年卒(第56期) 浅岡 勤・加藤正秋・内藤 博
- 昭和30年卒(第57期) 藤本一郎・塚本弘子
- 澤田嶽郎・武田有弘・吉田精吾
- 小竹嘉子(滝田)
- 昭和31年卒(第58期) 広田洋吉・坪田憲俊・小川英夫
- 岩間征一郎・永野 巖
- 藤原正樹・近藤好介
- 宮川美智子(重野)・早川光江(岡)
- 小林重行・真船 昭
- 昭和32年卒(第59期) 岸本文子(渡辺)
- 昭和33年卒(第60期) 内藤 尚・北原耕太郎・白戸寿男
- 信太紀二・上平慶一
- 石渡悦子(高橋)・山根信子
- 高橋留美子(三輪)・松田栄美子(木下)
- 松本 充・村岡静生・加藤紀興
- 昭和34年卒(第61期) 畑中万弘・佐々木住明・橋本正夫
- 金子公彦・三上洋一・大久保康宏
- 伊藤記久子・坂崎紀美子(品川)
- 後藤玲子(野口)・三上和子(清水)
- 藤田美穂子(堀田)・福井利恵
- 荒井 浩・佐々木慎悦・玉川 修
- 辻 明・小松康宏
- 昭和35年卒(第62期) 石田公子(一戸)・高階公恵(井波)
- 小林嘉則・山崎良英・戸村文彦
- 昭和36年卒(第63期) 越後谷宏・国井周明
- 福本元子(浅間)・石崎篤子
- 土橋道子(山本)・本富實子(三國)
- 山崎康子(秦)
- 昭和37年卒(第64期) 岡本 馨・関 英夫・徳田定勝
- 山崎栄治・佐々木京子(中村)
- 田中公子(浅野)



- 昭和38年卒(第65期) 小嶋正蔵・菅原大作・千葉恵寿
- 昭和40年卒(第67期) 加賀幸彦・相馬研二・中川 真
- 花海吉夫・松田幹夫
- 昭和41年卒(第68期) 大河原綾子(小沢)・及能誠一
- 児玉久美子(中村)・相馬 亮
- 白崎純一郎・木戸正文
- 昭和42年卒(第69期) 梅田五郎・奥野政博・高木 隆
- 浅田香(松尾)・梅田やよい(上野)
- 齋藤裕子(三上)・大久保節子(丸山)
- 昭和44年卒(第71期) 加納元雄・高野 泉
- 昭和45年卒(第72期) 小林繁治・菊池佳裕・丹羽 修
- 谷口雅典・笹川浩史
- 佐野香苗(小岡)
- 昭和46年卒(第73期) 小林隆鷹・葛西 浩・田澤博実
- 山田 朗
- 昭和47年卒(第74期) 厚谷 諭
- 昭和48年卒(第75期) 浅見道子(保村)・足立文子(大嶋)・宇野智子(伊藤)・桑原洋子
- 赤津寿子(江口)・菊地恵子(松本)・北村知文(藤田)
- 黒柳信子(中村)・佐々木正子(葛西)・鈴木紀久子(吉村)
- 田村美穂子(大野)・千鳥秀子(富原)・湯座はるみ(大野)
- 和島万里絵(越田)・小栗純子・相川淑紀・小河廣行・金丸洋一
- 河村浩介・黒柳 仁・近藤 薫・斎藤文夫・佐藤雄二
- 祐川伊左久・瀧口昭彦・高田博行・高橋日出樹・高橋幸伸
- 角掛康弘・土橋敏明・佐藤睦郎・長嶋裕司・成田眞一
- 林誠之介・淵田紳一・星見定広・増田博幸・三浦正裕
- 武藤匡志・村田弘幸・吉川忠幸 岩坂貴弘・阿部博光
- 井口 尚・石岡久和・佐々木康人・高杉武利・小原泰次
- 古田美樹(松原)・浜田ひとみ(山岸)
- 昭和49年卒(第76期) 猪狩正夫・加藤誠也・白川正広・曾我正彦・竹埜正敏・松浦 明
- 庄子正子(平原)・竹埜しをり(泉)
- 大鹿栄樹・吉崎 収
- 昭和50年卒(第77期) 垣坂 清・島津路郎・斯波宇司
- 立野泰昭・長澤一徳・宮崎恒春
- 山平匡人・塚本良子(伊藤)
- 山内清美(藤島)・吉崎加代子(丸山)
- 岡部あさ子(三浦)
- 齊藤聡・片瀬裕巳
- 昭和53年卒(第80期) 小林八千代(不京)・塩田安子
- 今任美也子(児島)
- 昭和58年卒(第85期) 岡川 直
- 昭和59年卒(第86期) 五十嵐浩行
- 平成7年卒(第97期) 松川文弥
- 平成8年卒(第98期) 及川博志
- 平成9年卒(第99期) 仲谷美波
- 平成15年卒(第105期) 花田達郎

参加者総数 213人



(5) 東京白楊だより

特 集

ジャズピアニスト加茂紀子の ニューヨーク物語

（函館市文化・スポーツ振興財団発行
「ステツプアップ」二〇〇五年掲載記事より）



加茂紀子 昭和49年卒・76期

1956年、函館に生まれる。幼少の頃より母からピアノの手ほどきを受け、附属小・中学、中部高校を経て、上京。明治学院大学英米文学科卒業後、ジャズ・ミュージック・スクールにてピアノを専攻。10年間のプロ活動の後、ニューヨークへ活動の場を移し、現在「コットン・クラブ」のハウス・ピアニストとして活躍する。

2005年1月、158代はこで観光大使に任命された。

初めてのニューヨークで
アート・ブレイキーと出
会う

1985年8月、一ヶ月の滞在
予定で初めてニューヨークを訪れ
た。ジャズの本場ニューヨークを
自分の肌で感じてみたかつ
た。

マンハッタン東17丁目にある知
人のアパートの地下室に宿泊場
所を確保した。裸電球がひとつと、
小さなベットがひとつ置いてある
だけの部屋だったが、主なジャズ
クラブへ歩いていける距離にあ
り、家賃も安かったため、私にと
っては大変都合が良かった。



パリー・ハリス

8番街の28丁目にあったジャズ
カルチャーシアターという名前の
クラブに出かけた。（残念ながら今
はもう存在しない）そこではビーバ
ップの大御所パリー・ハリスが昼間
ワークシヨップを開いていて、生徒
たちがピアノを取り囲むように座
り、パリーの弾くフレーズを何度も
繰り返し復唱していた。

夜になると、そこはジャムセツ
ションの会場となっていた。セツ
ションに参加したいミュージシャ
ンは、ステージに一番近いテーブ
ルに置いてある紙にそれぞれの名
前と演奏する楽器名を書き込む。

すると進行係が順番に名前を呼び
上げ、呼ばれたミュージシャンが
演奏するのである。私もさっそく
自分の名前を書き込み、ドキドキ
しながら呼ばれるのを待った。私
が弾いた曲はたしか サマータイ
ム。緊張と興奮で頭の中が真っ

白になってしまった。でも弾き終
わって数人のミュージシャンから
「サウンド・グッド」と声をか
けられ、嬉しかったのを覚えてい
る。

ある日の午後、タイムズスクエ
アにあるレストランでランチを
食べていた。すると突然外から
「パン／パン／パン」と銃声が
聞こえ、入り口付近で誰かが「こ
こから逃げる／流れ弾が飛んでく
るぞ」と叫んだ。通りに出てみ
ると、5、6頭の馬が渋滞中の車
の合間を縫って走り回っていた。
それぞれの馬には警官が乗りまた
がっていて、何者かと銃撃戦を繰
り広げているのだった。あまりに
も現実離れした光景にアクシジョン
映画か何かの撮影ではないかと一
瞬目を疑った。いつも危険と隣り
合わせにあるニューヨークを感じ
た出来事だった。

ある日セツションでピアノを弾
き終わった私に、今は亡きハーレ
ム生まれのトランペッター パツ
キー・ソープ が話しかけてき
た。彼は年の頃50歳位、派手では
ないが美しいトーンで渋い演奏を
する人だった。私に仕事を頼みた

いのだと言う。日にちが合わず実
現こそしなかったが、実力のある
ミュージシャンから仕事に誘われ
たことで、ここでやっていける可
能性を感じ始めた。

ニューヨークでの残りの日々も
そろそろ終わりに近づいていた。
私はいつものようにジャムセツ
ションで自分の出番を待っていた。
その夜はやけにミュージシャンの
数が多かった。ある瞬間その場に
緊張感が走り、雰囲気が一気に変
わった。アート・ブレイキーがク
ラブに入って来たのだ。彼は無言
でミュージシャン達を見回し、何
故か私を凝視した。私を指差し、
身振りピアノを弾くようにうな
がした。私は他のピアニストたち
を押し、他のピアニストたち
向かった。ブレイキーがドラムの
ボジションにつき、全員が固唾を
呑んで一発目の音を待った。...

と、突然雷が轟き、火山が爆発し、
ナイアガラの滝が出現したかのよ
うな、とにかくとてつもなくスケ
ールの大きいドラムの音がうなり
を上げて鳴り出した。デジー・
ガレスピー作 チュニジアの夜
のイントロが始まったのだ。ホー



アート・ブレイキー

ンプレイヤー達がメロディーをと
り、我先にとソロをとろうとした。
するとブレイキーは「ピアノソロ
／ピアノソロ」と叫び、彼らを
制止した。私は無我夢中でソロを
とった。ドラムから発生する巻巻
の渦に、私の弾く音が吸い込まれ
ては消えていった。どれだけの時
間が経ったのか覚えていない。時
間の感覚をなくしていた。そして
巻巻が去った。曲が終わったのだ。
私はアート・ブレイキーが店を
出て行くのを放心状態で見送りな
がら、ニューヨークに移り住むこ
とを決心していた。



ハーレムでの新しい生活をスタート

1985年夏、一ヶ月間ニューヨークに滞在し、この街に移り住むことを決心した私は、とりあえず日本に帰り、渡米の準備に取り掛かった。日本を発つ直前まで仕事を続け、少なくとも三ヶ月ぐらいは収入なしで生活できるほどの資金を用意した。

そして1986年6月、再びニューヨークの地を踏んだ。とりあえずアパート探した。ニューヨークの家の泊めてもらったのを皮切りに、ミッドタウンのアパートメントホテル、ブルックリンでのサブレット、マンハッタンの南西にあるトライベッカ地区にあるロフト、キャナルストリートにある安ホテルなどを転々とし、やっと西78丁目の小さなワンルームに落ち着いた。そして小さなアップライトピアノを買った。

ある日、ジャズカルチャーシアターから、毎週土曜日のジャムセッションのピアノリストにならないかとの依頼があった。もちろんOKした。土曜日のセッションは（といっても正確には日曜日の朝）午前2時から朝の6時までやっていて、体力的にはちょっときつい時もあったが、大物ミュージシャンが自分達の仕事が終わった後にやって来ては演奏していくので、たくさん貴重な経験をさせてもらった。この仕事は数カ月後にこのクラブが閉店するまで続いた。

そしてこの期間に多くのミュージシャンと知り合い、仕事も少しずつ増えていった。

ある日ジャムセッションで演奏をして、休憩をとっていた私に一人のピアノリストが話しかけてきた。「君はハーレムのジャムセッションに行っていたことがあるかい？あそこのジャムセッションこそ本物なんだよ」と言う。興味を持った私の表情を見た彼は、さらに「火曜日が木曜日にハーレムにあるクラブピリスに行つてらん。僕の言うている意味がわかるよ」と続けた。ハーレムには何度か行ったことはあったが、いずれも時間帯は昼間が遅くても夕方くらいで、夜は行ったことがなかった。聞けば、ジャムセッションが始まるのは10時だという。怖い気持ちはあったが好奇心には勝てず、さっそく行ってみることにした。

7番街の133丁目、ピリスはあった。地下鉄に乗り135丁目の7番街で降りた私は、クラブまでの距離がとてつもなく長く感じたのを覚えている。人通り



マイルス・デイビス

もまばらで、とにかく危険な匂いがプンプンするのだ。すぐにでもビルの角に潜んでいる誰かに襲われるのではないかとという恐怖心を振り払いながら、早足で歩いた。

やっとの思いでクラブにたどり着いた私は目を見はった。あのピアノリストが言っていたのは本当だった。そこには長い間探し求めていた本物のジャズがあったのだ。サクソ奏者、ギターリスト、ベーシスト、ドラマーの四人が、もうこの日で死んでしまおうと思っ

ているかのような凄まじい演奏を繰り広げていた。エネルギーがほとばしり、あたかも彼等の体から炎が噴出しているかのようだった。ファーストセットが終わってミュージシャンのひとりが声をかけてきた。「君はミュージシャンなの？」私は「ピアノリストです」と答えると、「弾きたい？」私「ハイ」。すると店の奥にあったキーボードをステージに運んでくれた。

そしてセカンドセットが始まった。ベーシストがイントロを弾き始めた。マイルス・デイビス作の「オール・ブルース」だ。私はおそるおそる指を鍵盤の上に乗せた。ベースと私の音がブレンドしてくれ、ドラムがいい感じでサポートしてくれ、とにかく良くスイングし、それは一晩中続いた。

その夜、私は最後まで演奏に参加した。終わって外を見ると、いつの間にか雪が降り始めていた。ニューヨークで初めて見る雪だった。とても幸せだった。恐怖心はもうなかった。

ストリートミュージシャン達と武者修業

ニューヨークの名物のひとつがストリートミュージシャンである。10年ほど前までは街のあらゆる所で演奏風景が見られた。人通りの多い時間帯を狙って演奏し、通行人からチップを集めるのだ。突然、混んでいる地下鉄に乗り込んで、めっちゃくちゃな音を吹きまく

り、「やめて欲しかったらチップをくれ」というような、とんでもないミュージシャンもいた。車内は爆笑に包まれ、みんな、ついお金をあげてしまうのだった。一方で、1980年代には5番街の42丁目にあるニューヨーク図書館の北側のストリートで、お昼時になると凄まじいセッションが繰り広げられていた。当時はまだあまり仕事のなかつたケニー・ギャレット、ステイブ・コールマン、ウイナード・ハーバーなどのそうそうたるミュージシャン達が率いるグループが、一定の間隔をあけて陣取り、熱い演奏を聞かせていた。他にもストリートからスタートしてプロデューサーの目に留まり、成功したミュージシャンに、ギターのスタンリー・ジョーダン、アルトサクソフオニスト、そして私にトット・ハーリングなどがある。

ところが突然、ある法律が定められてしまった。ストリートで演

奏したいミュージシャンは、市が発行する演奏許可証を取得することが義務付けられた。許可証は年に一度行われるオーディションに合格したミュージシャンのみに発行。そしてスケジュール表が渡され、指定された場所で、指定された時刻に演奏するのだ。なんだか画一的でつまらないものになってしまった。許可証のないミュージシャンが演奏すると、ただちに警官に制止され、罰金を取られることもある。あの自由で明るくハングリーなストリートミュージシャンの姿が街から消えてしまった。残念でたまらない。

私もニューヨークに来たばかりの頃、仲間とストリートで演奏したことがある。ベースプレイヤーとサクソフオニスト、そして私はメロディカを吹いた。59丁目のセントラルパークの東南のコーナーを確保した。かなり人通りが多かった。ところが全員ストリートは初めて。通行人にアピールする演奏のしかたを全く知らなかった。どんなに一生懸命にやっても、誰も振り向いてくれさえない。2



(7) 東京白楊だより

メートルほど離れたベンチで横になつていたホームレスのおじさんが見かねて25セントをくれた。2時間ほど汗だくで演奏したが、この25セントが唯一の収入だった。

この初めての経験から数年が経つて、私はハーレムにあるラ・ファミールというジャズクラブのハウス・オルガニストを始めていた。そこにしよっちゅう吹きに来るアルトサクスのおじさんに、ストリートを一緒にやらないかと誘われた。あまり上手とはいえないおじさんだったが、初めてのストリートでの敗退のリベンジもしたかったので引き受けた。充電式のスピーカーを持って来てくれると言うので、私はキーボードだけもって約束の場所待合させた。59丁目の地下鉄のホームだ。A、B、C、Dと4本のラインが乗り入れているホームで、人通りも多いが騒音もすごい。こんなところさい所で演奏など出来るのだろうかと思つたが、彼はすぐに演奏を始めた。すると、クラブではあまりさえないこのおじさんが豹変した。とにかく良く音が通るのだ。そして忙しそうに歩くニューヨークカー達の足を止めさせる技を持つ、ストリート歴数十年の超プロだった。私とおじさんはまるで長い間一緒にコンビを組んでいるかのよう

偉大なミュージシャン達との出会いと別れ

1987年1月、ブルックリンにあったジャズクラブ パンプキン からピアノトリオの仕事が頼まれた。クラブのオーナーは私のためにドラマーを選んでもくれた。なんと、アーマッド・ジャマルトリオの初代ドラマー パニール・フルニエだ。15、16、17日の3日間演奏した。演奏を楽しむと同時に自分の未熟さを痛感した私が、「よいピアニストになるためのアドバイスをください。」と頼むと、「君はアーマッドと同様な特別のタッチを授かっている。あと10年弾き続けてごらん。よいピアニストになつていくから。」と微笑みながら答えてくれた。10年後、病気で下半身が不自由になつてしまった彼を訪れた。「あれから10年弾き続けましたよ。よいピアニストになつたのでまた一緒に演奏してください。」と言つと、「わかつたよ。リハビリをして、もう一度ドラムをたたくよ。」と言いながら、腕を動かしてドラムをたたく仕事をした。残念ながらそれは実現しなかつた。1年後、彼は他界した。

1987年6月、私はパトリックサクスの妻のサヒブ・シハブのグループに参加することになった。サヒブは1940年代後半から1960年代にかけてのジャズの黄金時代を生き抜いた人で、デイジー・ガレスピー、マイルス・デイビス、ジョン・コルトレーン、セロニアス・モンク等と共演した大御所



チャーリー・パーカー

だ。しばらくヨーロッパに住んでいたが、ニューヨークに戻ってきたばかりであった。ビッグバンドとカルテットの活動が始まった。彼はもろろん私よりずっと年上であったが、私たちはまるで同年代のように対等に話し合い、音楽のことで口論もした。1年間ほど順調に仕事が続いていった。あるとき一本の仕事がキャンセルになり、サヒブからの連絡が途絶えた。どうしたのだろうと思つていたら電話があった。サヒブが病気で、ロングアイランド(ニューヨーク郊外)の病院に入院しているという。会いに行くと、私の手を握り、「のり子、約束してくれ。どんなことがあつても、どんなに困らなくてもピアノを弾き続けるということをや。」と、私の目をまっすぐに見つめながら言った。私は「イエス。」と答えるのが精一杯だった。それが私たちの最後の会話だった。数日後サヒブはこの世を去つた。苦しい時が何度かあつたけれど、そのたびにサヒブとの約束を思い出し、乗り越えるこ



ビリー・ホリディ

1993年2月、82歳のテナーマン デューク・ワシントンに仕事を頼まれた。彼は老人ホームで演奏活動をするバンドのリーダーだった。そこでボーカルを担当していたのが、ジュリー・ガードナーだった。彼女はチャーリー・パーカーやデイジー・ガレスピーがいたころのオール・ハイインズのビッグバンドでアコーディオンを弾いていた人だ。ハーレムで生まれ育ち、ビリー・ホリディとの交流も深かつた彼女のボーカルは、明らかにビリーのスタイルを受け継いでいた。彼女の節回しはまさに絶品だった。70歳後半に差し掛かつた彼女の歌声は少女のよう

の後ジュリーの病氣は回復せず、数カ月後に亡くなつた。すばらしい先輩ミュージシャンたちとの出会いは、私の宝物だ。彼らの魂は私の心の中で永遠に輝き続ける。

ハーレムの顔「コットンクラブ」と交

ニューヨークにあるほとんどのジャズクラブでは、ハウスバンドは雇わず、いろんなグループが入れ替わりに出演する。なにしろこの街は世界中からやってくる実力のあるミュージシャンがひしめいている。ローテーションのスピードは速く、仕事の争奪戦も激しい。1989年の春、ハーレムに移り住んでからオルガンやキーボードも弾き始めた私は、仕事場の範囲が広がり、じつに数多くのクラブで演奏をしたが、めまぐるしい移動や楽器類の運搬に疲れ果てることもあつた。

1997年4月のある日、コットンクラブから電話があり、仕事を依頼された。このクラブは、2代目オーナー ジョン・ビーディが1977年にオープンしたもので、125丁目東の端に建っている。(オリジナルのクラブは1923年、1932年まで、14丁目、レノックス・アベニューにあつた。デューク・エリントン・オーケストラ等が出演) レギュラーのミュージシャンが常時出演するこのクラブでの初めての仕事は8人編成のジャズバンドのピアニストの エキストラ (代わ



コットン・クラブ

りを務める人)だった。メンパーは皆ベテランのツワモノ揃いでかなり緊張させられた。その後も、エキストラとして何度か仕事をした。1999年1月、クラブのオーナーから「君にはもう電話をしないよ。」と言われ、一瞬何のことだろうと考えたが、それは私をレギュラーとして雇うという意味であった。黒人のエンターティナーのみが出演するのが原則のコットンクラブでは異例のことだった。こうして私はハウスピアニストになった。同時に毎週月曜日がスウィングダンスナイトとなり、ビッグバンド(コットンクラブ・オーケストラ)の演奏も始まった。クリエイティブなジャズを演奏する場ではないが、伝統的なジャズ・ブルース、リズム・アンド・ブルース、ゴスペルなど、日本で生まれ育った私がじかに接することがなかった音楽に接し、演奏することができると同時に、私にとって、仕事場であると同時に、多くを学ぶ場所となった。そして、自分のキーボード類を持ち込み、ピアノの周りに

にセッティングすると、いつもたぐさんの鍵盤(キー)に囲まれてるところから、「ノリコ キーズ カモ」というステージ名がついた。ある日、リズム・アンド・ブルースの歌手の伴奏中、バックグラウンドを半ば遊び心で歌っていたら、それを聴いたバンドリーダーのアル・バザンに、「君は歌も歌うの?」と聞かれた。小さい声で「ハイ」と答えたら、つぎのセットで一曲歌うようにいわれた。オール・オブ・ミー を歌い終わるとクラブはシーンと静まり返った。皆、口をぽかんと開けていた。それ以来、私はボーカルも担当することになった。

私の父は1998年に他界したが、生前、「俺が死んだら骨はハドソン河に流してくれ」とよく言っていた。私たち家族はそれを冗談と受け止めていたが、コンサートの仕事を終えなければならず、茶毘に付す日に間に合わなかった私に、母が父の遺骨の一部をそっと手渡してくれた。私はそれをニューヨークに持ち帰り、ハドソン河に沈めた。コットンクラブのすぐ横をこの河は流れている。私がジャズミュージシャンになることも、アメリカに渡ることも、何一つとして反対しなかった父は、日本で何度か演奏を聴きにきてくれたが、本当に嬉しそうに客席に座っていた。若いころバンドでギターを弾いていたこともある父はスウィングジャズが大好きで、母とシルバをよく踊っていた。ニューヨークに私の演奏を聴きに来たがっていた。コットンクラブの存在を知ら

ずに亡くなった父の言葉が今とても不思議に思われる。父の大好きだった曲を演奏するたびに、父を見る。楽しそうに指を鳴らしながら、すぐそのテーブルに座っている。

「キープスウィングング!!」

物心がついたころにはもうピアノを弾いていた。自宅でピアノ教室を開いていた母のレッスンを毎日聞きながら育った私は、ピアノを弾くことをごく自然に覚えてしまっていた。小学校5、6年生のころには、スキー、スケート、野球、水泳などスポーツに夢中になり、中学生から始めたバレーボールは大学時代まで続けた。その間ピアノからは少しずつ遠ざかってはいたが音楽への愛情はいつも心の奥にあった。ジャズを聴くのが大好きで高校時代にはジャズ喫茶に入り浸り、東京での大学時代にはアメリカから来日するミュージシャンのコンサートによく通った。

あるとき偶然訪れた小さなジャズクラブで、日本人のミュージシャンが演奏する生のジャズをはじめ聴いて感動した。小柄な女性のピアニストが男性ミュージシャン達と一緒に熱い演奏をしていた。長い間私の中で眠っていたピアノへの愛が目覚めたのを感じた。私はジャズを演奏することが自分の天職であることを確信し、その後は迷いもなくプロになった。多くのミュージシャンとの出会いがあり、刺激しあい、学び合いな

がら、現在に至ったが、私に一番の影響を与えてくれた人が、ジョー・デュークスだ。1987年2月、ハーレムにあったクラブ エポニー・ラウンジでピアノトリオの仕事をした時のドラマーが彼だった。オルガニストのジャック・マクダフ等と共にオルガンジャズの黄金時代を築き上げた人だ。彼はこきげんにスウィングするオルガンドラマーとして知られていたが、何の楽器とでも、またどんなスタイルでも演奏できる、本当に素晴らしいミュージシャンだった。そして、自然で、謙虚で、偽りがなく、誰に対しても分け隔てなく温かく接する人柄で、音楽的にも人間的にも心から尊敬できた。

ジャック・マクダフとのグループ活動が終わってフリーだったジョーは、私と一緒にグループを作りたいと言ってくれた。ベースにアーネスト・マッカーシー(エロール・ガーナーとの共演で知られる)を迎えトリオを結成した私たちは、サットンズ、ベイビー・グランド、ノーザン・ライト、ピリース、シヨーマンズ、ラ・ファミーユ等、ハーレム中のクラブを制覇し、ブルックリンやダウンタウンでも演奏した。もちろん実力的にはジョーにかなわなかったが、いつの日か、最高のコンサートホールで、最高のミュージシャン達と最高の演奏をするのが私達の共通の夢だった。

そのジョーが1992年12月に亡くなった。ショックだったが、ジョーとの夢をかなえたいという強い気持ちで私の新しい活力とな

り、演奏活動を続けることが出来た。生前ジョーが何気なく口にしていた言葉は時としてよみがえり、今なお私に知恵を与えてくれる。彼から授かった ソウル は私の中でいつも輝いている。

白楊ヶ丘同窓会東京支部設立30周年記念
ジャズライブコンサート公演
加茂紀子 フロム ニューヨーク
ウイズ函中ジャズメン米木康志アンド音音
2006年(平成18年) 10月2日(月)
開場18時30分 開演19時~終演21時
トリトンスクエア・第一生命ホール(晴海1-8-9)
都営大江戸線・勝どき駅下車徒歩8分
入場料:4,000円(前売り3,000円)
主催:函館中部高校白楊ヶ丘同窓会東京支部
協賛:ジャックス 協力:第一ビルディング

グ!!
眼を閉じるとジョーの声が今も聞こえる。「キープスウィングング!!」



中国と道南の昆布

45期(昭和18年卒)
田沼 修二



ドックに向かう市電が末広町を通る一本上の通りの大町の角に、「中華会館」の特異な建物がある。もともと幕末から函館を拠点に海産物貿易に携わっていた華僑の人々が、巨費を投じて清朝時代の

建築様式を函館に移したもので、戦前は中華民国領事館として威容を誇っていた。従ってその内部を垣間見るとは許されなかったが戦後のある時期から一般に解放され特異な観光スポットとなっていた。しかし日中関係が微妙になった昨今は閉鎖されている。

建物は長崎や神戸、横浜の関帝廟と同様、建物の中央には関羽の像を中心に華麗な装飾品が飾られていて、一見して相当に金のかかった構造物であることがわかる。関係者に聞いた話では、函館にきた華僑は主として特産の昆布を扱って巨万の富を築いたという。

函館から積み出された昆布は北前航路で敦賀に運ばれ、一部は京都や大阪で「塩昆布」に加工され今日でも愛好されている。しかし多くは沖縄に運ばれ中国に密輸出されたという。

もともと黄河流域の黄土高原の土質はヨード不足地帯で、流域に風土病としてバセドウ病患者が多く、昆布を粉末にして飲ませると薬効抜群で、昆布は調味料としてではなく、特効薬として高く売られ華僑に巨万の富をもたらした。

戦時中、中国の昆布需要に応えるため満鉄の技術陣が北海道の昆布を中国沿岸で栽培する研究に着手し、成功直前に終戦となり涙を飲んだ。しかしこの技術を日本に持ち帰り、戦後の三陸沿岸の振興策に成果を挙げた。

中国はこの技術を導入し山東半島で昆布の生産に成功。中国国内の需要に応えた上、日本向けの安い昆布の佃煮を輸出するに至っていた。

ある統計では国産の昆布の生産量は年3万トン程度、中国からの輸入は1500トン位で貿易摩擦を起すほどではないという。それにしても、わずかに150年の間に北海道と山東半島の間に動いた昆布の運命の不思議を思う。

空襲を免れて

54期(昭和27年卒)
杉田 博子

今でもはっきり憶えていることがある。昭和20年終戦の年、私は柏野小学校の6年生だった。学校では空襲警報発令の時兄弟が集まって下校する練習をよくやった。

私は越境入学していたので、本町の自宅まで一人で帰った。ある時母が学校に呼び出されて、吉岡方面に集団疎開をするのだけれど食糧がない状態なので、出来れば知り合いへ縁故疎開をしてほしいといわれた。結局遠縁にあたる函館から当時の汽車で5時間位の倶知安の近くの目名へ疎開することになった。勉強道具をランドセルに詰めて着替えは母が背負って、市電にも乗らず函館駅まで30分位かかって歩いた。まもなく空襲警報のサイレンが鳴り警防団の人の指図で函館駅前の防空壕へ、みんなが我先にと入った。その時母は私を引っぱって家へ帰ろうと言った。急いで見つからないように家の方へ戻った。私達は市電の線路を走るようにして歩いた。途中何度も警防団のおじさん達に「どこを歩いているのだ、軒下を歩け。」と怒鳴られて家にたどりついた。その日、家から駅の方を見ると飛



昭和17年当時の函館駅前

行機が急降下して赤い炎が上がっていた。大人達は口々に敵機が日本軍に撃たれたと拍手して喜んでいたら、実は敵機が急降下して連絡船を撃っていたのだ。それが7月14日の函館空襲であった。翌日空襲警報も解除になり昨日の荷物を持って母と函館駅へ出かけた。そこで見たのは駅前の防空壕から昨日爆撃された真黒に焦げた死体が次々と担架に乗せられて運び出されている所だった。母は絶句して呆然と立ちすくみ涙を拭いていた。私は何が起きたのかわからず、「どうしたの?」と聞いたが、「見ない方がよい」といって私の手をぐいぐい引っぱって駅の方へ行った。母はそれっきり防空壕の話はしなかった。私が成人してから、「あの時、虫の報せで我が家に帰りがかった。神様が命を助けてくれたのだから感謝して人のために尽くして恩返しをしなければ」と話したあの時の母の顔を想い出す。命拾いをして幸せに過ぎた何十年、私は色々な人達に折にふれて恩返しをしなければと思っ

終戦忌 命たすかり遠き日々
博子

ワールドカップ2006 ドイツ大会に行く

73期(昭和46年卒)
山田 朗

チケット無しでブラジル戦に向かう。アウトバイン往復1700km、一人ドライブの旅。そして長年の夢・旧東ドイツのライプツィヒ・パツハの墓参りへ。

6月19日夕刻、夏のフランクフルト空港に到着した。予選リーグは既に2試合が終わり、日本はいよいよ背水の陣、次のブラジル戦は2点差で勝利しなければ決勝リーグへ進めないという状況に、私が行くからには絶対勝利すると皆に豪語してきたものの、航空券は昨年12月に予約したのだからこの状況に追い込まれるとは予想もつかなかった事である。

振り返ると自分は6月に海外にいくことが多く、W・CUPの大騒ぎを色々な国で触れていて、一度開催国に滞在し、生で体感してみたいと言う欲望と、今回ドイツへ行くことでセント・トーマス教会に行つてパツハに触れてみたいと言う欲望と2つのことが達成できるとも思えない、と小さな夢を実現できる絶好の機会と思いついて昨年来ひそかに計画していた。

しかしながら日本 ブラジル戦のチケットは持っておらず現地調達に望みをかけて、翌朝日本で予約を入れておいたハーツレンタカー・フランクフルト駅営業所へ向かった。今回の旅は全く「行き当りバツタリ」のその日暮らしと決

めていたが、到着日のホテルとレンタカーのみ日本からインターネットで予約を入れておいた。一人旅であるし値段の安さでコンパクトカーを選び8日間約5万円で予約したが、当日念のため保険をタママリ掛けたため7万円となった。しかし、このコンパクトカー（フィアット・プント）が直ぐに失敗だったと気付く事になる。

昨晚購入しておいた地図を助手席に広げ、ブラジル戦が行われるドルトムント迄はわずか200kmである。しかし、街中から高速道路のアウトバーンに入るまでは右側走行の感覚に早く慣れなくてはならない。左ハンドル・マニュアル・ナビ無し車で初めての道を行くのはかなり緊張する。私の持論であるが車は片手運転出来るスピードで走る事が原則と思っている。両手でハンドルを持たなければならぬスピードはその人の限界を超えている。助手席の地図の上にはカメラ2台とビデオがスタンプイ状態、左手でハンドル、右手でシフトレバーを操作し4速にギアを入れたら右手はフリーになる、ビデオをオンにする、フロントガラスの向こうに広がるドイツの街並みをカメラに収める。

実は日本にいる時も車から例えば富士山の雄姿を写したり紅葉の山並みを写したり、運転しながらファイナダーを覗かずに感覚で撮影する事を良くしている。レンズの方向だけ注意し運転しているのをご心配なく（30年間無事故である、バンパー擦りはあるよ!!）今回は異国の地で全く初めての道で

のことであり確かに緊張はしていたが、帰国しビデオを見る限り良く撮影されていた。

さて、いよいよアウトバーンの進入路に入りアクセルを踏む。アウトバーンは大部分が3車線であり、右側通行であるから右側から進入し徐々にスピードを上げてゆく。100から110km/hが一番遅い右の車線、トラックやキャンピングカーがほとんど。次に真ん中の車線に移ると130から140km/hである。日本でのスピードと比べると平均的に30〜40km/h速い／暫く真ん中の車線を走っていると一番左の車線をどう見ても180km/h以上で追い抜いてゆく／自分も後に続けばかりに追い越し車線に入りアクセルを踏む／が、スピード出ない／160km位で上がらない、後ろからあつという間に近づいてくる、1400cc・95馬力のコンパクトカーでは無理であったと後悔。結局今回の旅の最高スピードは長い下り坂を利用して190



km/hが最高であった。今回は2000cc以上の車を絶対借りるぞ、と心に強く刻んだ。

この日はドルトムントのサッカー会場を調べ、試合の終わる23日まで滞りできる宿を探すことが最大の目的である。もし見つからなくとも最悪は車で野宿の腹積もり、ドルトムントは開催都市であるから値段が高いことが予想される。30km手前にハーゲンという都市がある。ここで見つけるのが妥当と考え、まずは鉄道駅のインフォメーションを訪ねる。ドイツはご存知鉄道国であるから鉄道で各地の会場を巡る人たちのためには駅には必ず会場案内やホテルの案内がある。ここで文字だけのホテルリストのコピー入手、文字だけから程よいホテルを見つけ（見つけ方は自分のビデオに細かく自問自答している）自分の目で確かめてホテルを決める、予想以上に良いホテルに巡り合えた（Hotel ARCADEON, Haggen）。さてこれで安心して決戦の



準備に入れることとなった。

さていよいよ決戦の22日だ、がチケットはまだ無い。午前中にドルトムント市内のFIFAオフィシャルインフォメーションへ行く、ボランティアの人たちが親切に対応してくれる。「チケットを持っていないが入手できるか」と単刀直入に聞く、会場周辺で買えるかも、では「いくらで買えるか?」と聞く、困った様子で周りの仲間聞いてくれた、「200ユーロ位かな...」

実はこの返事を聞くまでは余りに高いようなら周辺のパブリックヒューイングで騒ぐのもいいなと思わせる位この手の会場が整備されていて、飲み物や食べ物も美味しいのと、多くの観衆で盛り上がり、わざわざ競技場に行かなくても良いと考えていた。



枚欲しいらしいが席がバラバラのようでは話がまとまらない。別のひとりのオッサンが一枚買った。300ユーロだ、私は、200ユーロでどうかと聞く、と鼻で笑い、「レッドゾーンのセンター付近のシートだ」と言っている（実はこのタフ屋はブラジル人のよつでなまっついて良く聞き取れない、向こうからするとこつちもなまっついておもしろくないが）さっさと歩き出した。ここで諦めるか、買うか、ここまで来たなら決断するしかない。ブラジル人サポーターに買われるくらいなら俺が買ってやる、つと小走りに後を追いかけて「チケット一枚」

球場の席は確かに良かった。テレビ中継画面を見ているような位置で全体を見渡せる。向かって左ゴール側に日本サポーター、右ゴール側にブラジルサポーター、自分の席はセンターであるから両方混じり合い、直ぐ前のブラジル人のプラカードが視界を遮る。参ったなあと思いつつ、いよいよキックオフの笛、すると慣れた様子で



ブラカードは彼等の膝に落ち着いた。試合結果は言うに及ばず、日本人サポーターはがっくり肩を落として帰った。

翌朝は負けを引きずっていたものの、気を取り直し、ここから一気に東へ400km、次の目的である旧東ドイツのライプツィヒ目指し出発した。アウトバーンで行けば5時間で着く計算であった。しかし、A44号からA38号線に入ったところでこの先工事中、一般道路へ降ろされてしまった。まだ旅程の半分である。

内心不安があるもののこれが一人旅の楽しさでもある。地図だけが頼りで東へと向かうが夕方が近づいてくる。地図上少し文字が太く書いてあるミュールハウゼン(東西南北ドイツのど真ん中)という街で宿を見つけることにした。観光地図には無いが正に中世の町であった。1700年から続く宿に泊まり一日ゆっくりとし、一日遅れてパッサの墓参りと相成った。(この続きと町の詳細は私のホームページ)

<http://homepage2.nifty.com/archippe/>

私の函館時代

73期(昭和46年卒)

米木 康志

ポップス好きだった俺が、中学の終わりから高校にかけて、突然ジャズの魅力に取り憑かれた。

単純と複雑、繊細と大胆、冷めた感覚と熱い感情、躍動するリズム、軽妙な深い音色……。こんなアンビバレントな個人的表現にすっ



かりハマっちゃった。それまでなにげに見てた「JAZZ」と言う言葉や文字が気になりだしてね。「どっかにあったなあ……」。

五稜郭電停前から五稜郭公園へ向かう行啓通りの右側に、ジャズのレコードを店内に流している、「ワクワ」という名の喫茶店が……。

「行きましたよ、高校一年の時に」このドアの向うに「jazz」が、そして今まで経験したことがないanother worldがあると、思うとワクワクしたのを、昨日のように思い出すなあ……。

ドアを開けると、そこはダークな色調の内装と相まって薄暗く、椅子席が10ほどあった。もちろん期待どおりに、ジャズがそれほど大きくない音量で流れてた。少し緊張しつつ、さて、どこに座るか?と座った時、左手に5人ほど座れるカウンターを発見あそこに座ろう。

「いらっしやい、何にします?」「コーラをください。」

白いシャツの上にタータンチェックのベストを着た、中年と思しき渋い店主に答えた。

うんなかなかな大人の世界だ。子供の俺は、緊張と軽い興奮、ムードとのギャップを感じつつも勝手に一人悦に入っていた。

そのころ市内には「ラクラ」のように、ジャズレコードをかけてる喫茶店がまだまだあった。函館山の麓、青柳町には「想苑」。函館駅そばには「エアリー」。松風町に「ボア」。(その後「top of the gate」になり、現在は「あつん堂ホール」)東京の大学に入学する迄の、高校三年間は放課後(のみならず授業中も)、それぞれ個性の違う各店へ授業を受けに行ったものだ(みなさん、お世話になりました。ありがとうございました)。

そういう生活を送っている内に、演奏したいという欲求が増して来た。躍動するリズムの一端を担っているコントラバスを弾きたい、中学の頃見たTV番組「シャボン玉ホリデー」の中で、クレイジーキャッツの犬塚弘が弾いていたベースブレイが、心の奥底にかなり残っていた。

現在、ベースプレイヤーとして生活しているけど、以前にも増して「楽器と自分の距離」が近づいている事を実感する。

これは非常に嬉しいことだ。街は、目に見えない部分も含めて、人が造りあげていくと思う。

その街が、後に来る人々に豊かな影響を与える……。函館は、いつもそういう街であって欲しい。

無菌室・函館

99期(平成9年卒)

音音(仲谷美波)

東京から函館空港に降り立ち、迎えに来てくれた両親と顔をあわせ、実家のある西旭岡町まで車で

5分。愛犬に挨拶を終えた頃、体の力がゆっくりとぬけ、肺が函館の新鮮な空気を取り込みはじめた。細胞の中に刻み込まれた記憶とでもいうのでしょつか、緑の香、日光の量、音の響き、ひんやりとした空気の感触、五感で感じられる全てが、私の一番深いところにある記憶を呼び覚まし、心身をせ口に戻してくれる。函館は私にとっては、何の汚れもない無菌室のような街です。

今まで、私は3つの都市で生活をして来ました。函館、ニューヨーク、東京。ニューヨークと東京は、色々な文化と情報が混在し、うっかりしていると、何かの流れに足をすくわれてしまふ、そんな町であると思います。その点函館は、人よりも自然の方がより大きな存在感をもち、自然のベースにあわせて時間がゆっくり流れるように感じます。

私が歌 という夢を持ち始めたのは、小学校の4年生の頃。ホイットニー・ヒューストンの声に魅せられたのがきっかけでした。彼女の歌真似を一生懸命していたことを、今でも思い出します。そして、それとセットに思い出されるのが、家の外の静寂、ヒンヤリとした空気です。CDプレイヤー



との熱いデュエットを終えて、窓を開けると、私の汗と興奮の練習時間とは対照的に、静かな自然がありました。それにより一層、際だたされた私の夢はメラメラと燃え出したように思います。歌 という夢の芽吹きが比較的早かったのも、心の中を静かに保ち、変化に気づきやすい無菌室の環境があったからだと思います。

東京へ出て、ことしの6月で3年になりました。その間、プロの歌手として様々な勉強をしてきたつもりです。当初は、ニューヨークの感覚そのまま歌っていました。一度つくりあげたスタイルを変えることは、誰でも抵抗があると思います。しかし、私は、東京(そして日本)のお客様にむけた歌の表現的な技術を変更し、向上させるため少々時間を要したものの、心は素直にニューヨークモードから東京モードに変更ができたと思います。生まれてから高校卒業までの18年間を過ごした函館という無菌室は、私に強い抵抗力や柔軟性をも与えてくれた様です。

函館が私に与えてくれたものの中で、最も大きなプレゼントは、郷土愛だと思っています。どこにいても、何をしても、自分がどこから来たのか、何を目的として函館を後にしたのか、それを忘れたことはありません。私は函館が大好きです。故郷を愛する心、それは、私にとつてのゆるぎない力になってくれていると思います。

これからも函館で培った心、無菌室な精神を失うことなく、邁進していきたいと考えています。

函中人物記

孤高の探偵小説家
久生十蘭 (旧制・函館中学22期生)

南方戦線つづる従軍日記を発見

伝統的な探偵小説誌「新青年」で活躍し、江戸川乱歩らに次ぐ大家の一人だった直木賞作家、久生十蘭(1902-57)が、太平洋戦争中、南方戦線で記した「従軍日記」が神奈川県鎌倉市内で発見された。私生活を明かさないうことで知られた孤高の作家の戦争体験が克明につづられた貴重な資料となりそうだ。

十蘭は、43年2月から1年間、新聞などに戦地の様子を執筆する海軍報道班員として、ジャワ島やニューギニアを転戦した。従軍日記はこのうち日本出発から9月1日までの行動記録をA5判大の日記帳



久生十蘭 函館市出身。演劇に傾倒した後、「新青年」に「魔都」(十蘭(あじむらう))「捕物帳」など多くの探偵小説を発表。時代小説やノンフィクションノベルを含め大衆文学を幅広く手がけた。死後も夢野久作、小栗虫太郎らと並び昭和の異色作家の一人として度々再評価されている。

図があるとして死刑になったオランダ人老人がいるとの話を聞き、「これ即ち戦争なり」と、哀れむ感情を戒める記述もある。

日記そのものは癖のある字で書かれ、アンボン島やニューギニアの前線基地を回った後半の記述は、今後判読が必要。十蘭は前線で機銃掃射を受けたり、一時行方不明と伝えられるなど過酷な体験をしたといわれ、帰国後書いた戦争作品と実体験との関連も明らかになりそうだ。

十蘭全集の刊行を予定している江口雄輔昭和女子大教授は、「生前、身辺雑記やエッセーをほとんど書かなかった彼の生の姿が分かる貴重な日記。公式報道では見えない、太平洋戦争下の南方の日常も理解できる。」と評価している。(平成17年8月11日 読売新聞の記事より転載)

久生十蘭(22期)は、本名阿部正雄。本校2年のとき、授業時間中「小便してきたいのですが」と先生に言うところを先生も真剣に講義していた最中だったので、ぐつときたのだらう。出たかったらそこでやれ「ハイそんならここでやります」というやいなや、教壇の横にあつた掃除用のバケツへ派手な音を立ててやったが、退学ということになってしまった。東京の中学に編入。帰国後、函館新聞の記者を勤め、演劇グループや文学会に参加。同人誌にエッセイや劇評などを発表した。岸田国士に師事し、演劇雑誌の編集も担当した。演劇の勉強のため4年間、パリに留学。帰

国後、舞台監督の助手を勤める。このころ、石川正雄(啄木の娘婿)らと行動をとるにした。「新青年」『オール読物』などにペンネームで作品を発表、文章活動に力を注ぎ異色の神秘的魅力的な作品で永く余韻を残した。戦時中は海軍報道班員として海外生活を強いられる。『鈴木主水』で第26回直木賞受賞。隊員として海外生活の経験を描いた『母子像』はニューヨークのヘラルド・トリビューン紙の国際短編小説コンクールで第一席を獲得するなど世界的にも評価されるが、昭和32年、食道ガンのため55歳で死去。作品に「だいいん」十字街『肌色の月』などがある。

アチャラカ芝居の虫

80期(昭和53年卒)
西谷尚久

「芝居をやっています」と言う人多く人が演劇と思われれますが、一言で芝居と言ってもなかなか広うございます。歌舞伎、新劇、ミュージカル、果てはアングラ小劇場。その中でも、私がやっております物は、世間一般で言う「軽演劇」とでも申しましょうが、テーマもメッセーシ性も無く、とにかく、その場さえ楽しけりや良いというウタバタ喜劇でございます。なぜ、広い芝居の世界に入りそんなクダラナイ物をやっているのかと申しますと、それはしょうがない。なぜならば、私には難しいことは分からないのでございます。

そんな私に初めて芝居と言うものを教えてくれたのが、佐藤B作他東京ヴォードヴィルショーの先輩達であり、時たま遊びに来ていたトニー谷さんでありました。友人たちからクダラナイ男とさ

れていた私も、プロのクダラナイ男と接している内にクダラナサに磨きを掛けねばと、次にSETと言つ三宅裕二さんの所で殺陣など教わり、その後よせば良いのに劇団を立ち上げたのが「脱線劇団ベージュわん」であります。

類は友を呼ぶと申しますが、バカにはバカが集まるもので、バカが何人集まっても出来る芝居はやっぱりクダラナイのであります。その後10年ほどして、こりやまた何の脈絡も無く突然「てなもんや三度傘」の澤田隆治の下で商業演劇やテレビ番組作りの製作スタッフを数年やって、生活も安定してきたのに、バカには学習能力が無い。今年また12年振りに芝居の世界に戻り、劇団名も一新し、その名も「脱線劇団ベージュワン・パート」であります。

コレがまた、相も変わらずクダラナイ。どの位クダラナイか函中卒業生の方々にも一度見て頂きたいと、言うよりお願いですから見に来てください。

脱線劇団 PAGE・ONE
第22回公演

全米が泣いた!
●任侠道が染み渡る
一気劇成の90分!

極道の妻... の旦那達

新宿タイニヤリス 2006年
9・8(金)~9・10(日)

前売=3,000円 当日券=3,500円

【お問い合わせ】
page_one2@yahoo.co.jp

第45期 翠楊会

田沼修二記

例年通り、今年も6月17日(土) 昼、NHK青山荘で翠楊会東京支部の総会を開いた。今年是他の会合と重なった欠席会員が多く参加者は9名と淋しい集まりとなった。来年以降は土日を避け週日に開催することとした。

会は会員の近況、函館や札幌の会員の近況の報告があり、今年も秋に函館で総会を開く旨の報告があった。会員の中西忠彦君は当日シヨパンの幻想即興曲の発表会と重なり止むを得ず欠席したが、会員一同80歳の精進に敬服した。アルコールの消費量はめっきり減ったが、談論風発で規定の時間を超え、喫茶室に席を移して歓談が続いた。

第57期 古希を迎えて

吉田精吾記

今年70歳の古希を迎えるのを機に、5月23日(火)に横浜中華街で開催した。函館や山形からも馳せ参じて出席者は39名(男性22名、女性17名)を数えた。

懇親会に先立ち、記念行事として、歴史的な見所が沢山ある「横浜山手散策」を企画、時々小雨がぱらつくあいにくの天候にもかかわらず27名が参加した。

午後2時に根岸線石川町駅に集合、山手イタリア山庭園にある重要文化財の「外交官の家」と元町公園

園の中にある戦前の西洋館としては最大規模を誇る「ペリック・ホール」を見学。外国人墓地をチャラとのぞいたあと横浜市イギリス館に隣接するローズガーデンでは今が見ごろの色とりどりの見事なバラに心が癒された。その隣にある港の見える丘公園の展望からの眺めはまさに横浜随一、横浜港やベイブリッジ、ランドマークタワーが一望だった。ここから階段を下りて一路中華街にある関帝廟へ。



竜飛岬で

世話になった青荷温泉を後にした。二日目は虹の湖から奥入瀬、蕨沼散策、八甲田雪中行軍遭難の碑等を訪ね、ブナの森の散策、神秘的な沼の景色を楽しみ、温泉と山の景色を堪能した。

ここで散策に参加しなかったグループと合流して記念撮影。4時から重慶飯店別館で懇親会。五つの丸テーブルを囲んで四川料理のコースを堪能した。アルコールは飲み放題だったが、この年にならなかつた。それでも積もる話に大いに盛り上がり、心行くまで旧交を温めつつ予定の2時間をオーバーして6時30分、再会を約して散会した。その後の2次会にもおよそ半数が参加、更け行く夜も忘れて昔話に花を咲かせた。

第62期 三五会夏の旅

池上拓磨記

今年、東北地方は6月15日に梅雨入りしたという。

昨日までの雨は止み、お天気に恵まれ、6月17日、18日の2日間、三五会の夏旅行に26名が参加した。

今回で10回目となる一泊旅行の宿泊地は、趣向を変え電気の灯りや、テレビもない山の中のランプ

の宿、青荷温泉であった。

初日、青森駅に集合し、竜飛岬、十三湖、金木町を訪ね、宿泊地の青荷温泉へと向かった。青荷温泉へは途中の中継場所(虹の湖公園)から、旅館のマイクロバスに乗り換えて、狭い山道を下って行った。

温泉に向かう山道は、新緑のトンネルをくぐる感じで、空木のピンクの花や、ニセアカシアの白い花が咲き、温泉とともに心身を癒してくる自然のご馳走であった。

テレビもラジオも電気もない一晩とは、どんな風であったかと思いませんか?(想像してみてください。もちろん、風呂は混浴、この話の続きは新年会でご報告予定) さて、翌日は快晴の夏日となった。中継場所に行く途中、岩木山を望む絶好の場所でマイクロバスを止め、山の空気を吸い、写真を撮るもの、山菜を摘むもの等それぞれが自然の恵みを十分に味わい、お



第63期 午末の会

小林嘉則記

この他に毎月第二木曜日に、新宿で二木会を開催し、6名程が毎月集まっています。新年会には、京都、名古屋、仙台からも来てくれる方がおり、約40名の出席者で賑います(来年は1月20日に新年会を開催予定)。関東地区三五会の皆さん、9月30日の東京支部親睦大会には多数ご出席下さるようお願いいたします。

今年卒業45周年を迎える63期・午末の会も東京同期会を始めてから23年目、22回開催となる。昨年創立110年という節目を迎えて函館に集結したので、今回東京での会は特別の企画もせず、ともかく関東周辺在住者に案内をした。いつもなら返信はがきをつける

のだが、最近是我々の年齢もメールを使う人も多くなったので、自分の都合の良い通信手段で返信を求めた。以前からはがきの返信は出欠に丸をつけるものだが、丸だけでは味気ない。ところが今回はファックスでもメールでも詳しく近況を書いてくれた返信が多く、まして携帯には本人が直接出るので話しても出来て、結果としては37名の出席があり、大いに盛り上がった。時は7月1日(土)5時から有楽町のニュートーキー 桃杏楼。慣例の自己紹介を全員にしてみようところだが人数が多いので、珍らしく、久しぶりの人から挨拶をしてみよう。トップは22年振りの松田博明君、佐々木敏信君、松村俊勝君も12、3年振りだ。始めの方こそ話を聞いてくれる

もの積もる話でワンワン状態。スピーチは適当に切り上げて、おしゃべりに徹する有り様。食事も年のせいかさっぱり片付かない。

最後に全員で記念写真を撮って7時半終了。7階から1階のビアホールに移動しての二次会もあつと言つ間の10時半。昔ならまだまだこれからと言つ時もあったが、最近はどうも十分腹一杯の様子だ。

60歳を超し、まだ現役もけっこう居るもの大抵は定年生活を送っているらしい。まだまだ元気ではあるが、最近出不精でねえという人もいるから、ますます顔ぶれも決まってくるかもしれない。この一年で5名も逝くなり、誰が最後まで頑張っているのか、そんなことを考える年齢に入ったと言つ事ですか。ちなみに卒業時368名、住所不明32名、死亡29名。

第65期・函中三八会 菅原大作 記

今年の函中三八会は、7月1日(土)と2日(日)の両日、東京・文京区本郷の「鳳明館」で行われた。土曜日の夜の宴会、その夜は一泊して解散、という宿泊懇親会は、平成15年に初めて実施して以来、今年で連続4回目。

今回は、25人(男性21人、女性4人)が参加。このうち18人が宴会のみの出席。宿泊者は7人のみだった。遠隔地からの参加は、函館の松原忠之氏と盛岡の蛸崎廣司氏、茨城の高野昇、藤原英樹の両氏、群馬の西田守氏だった。久々の参加は、金田(平光)祐子、栗原(関川)訓子、橋本(泰)祐子

さん、山初省吾氏。

初日の1日は、早い人では午後3時過ぎには到着。午後6時から宴会までの時間を、二次会の会場として準備していた控え室で、蛸崎氏のお土産の仙台名物・笹蒲鉾や近所の店で調達したお漬物を肴にビールを飲み始め、人数が増えることにビールの本数が増えて、本番の宴会前にかんりの人が十分酔いが回っていた。

宴会は和室の大広間で、二の膳付きの箱膳を前に座布団。風呂上がりで浴衣がけの人もいて、"あずましい"雰囲気の中で行われた。乾杯の後、しばらくして、各自に自己紹介を兼ねた近況報告をしてもらったが、仕事の話などよりはもっぱら病気の話題や体調不良などの話題が中心で、それぞれの年月の経過を感じさせる話が続いた。

午後9時過ぎに、全員で記念撮影をして宴会を終了。二次会場で、宿泊組と時間の許すメンバーが高校時代の思い出などを訪ねあつた。



翌2日は、朝食後、自由解散としたが、最寄り駅までを語りつくせない話をしながら次回の再会を約束した。

なお、この日の参加者には、欠席者からの近況報告と、最新の住所録を配った。また、次回の函中三八会は、今回と同じ鳳明館で、平成19年7月7日(土)宴会を予約した。

第67期 志丸会 相馬研二 記

昭和40年卒業の志丸会は年々その活動を活発化してきております。志丸会という名の由来は定かではありませんが40年卒業、志をもち、丸く(仲良く)する会の意味だと思いますが、東京志丸会は松田君、加賀君の献身的な幹事さんにより成り立っていることは申すまでもありません。

昨年10月に行われた函中創立110周年の際も、各地から大勢の仲間が帰函しました。卒業40周年の記念行事として同期の森戸春樹君のルーマニアでの貴重な体験 につき

函中校友会を借りし、迫力満点の模擬授業を行いました。本企画は札幌支部・西堀君の提案によるもので大変良い授業となりました。帰函の際はいつも澤口さんの喫茶店 サライ が集合場所となります。宴会、宿泊がある時は、河内君の 湯の川プリンスホテル、二次会は富原君のとみ原へ集合し色々な話題に花を咲かせ、カラオケをやるのが定番となっています。

東京志丸会是小笠原君のレストラン マド が集合場所となり、新年会、忘年会、各支部からの友

人が上京した際も、皆の集まる楽しい場所となっております。

本年1月には一昨年の40周年ツアーとして中国上海、杭州旅行に続き、日中旅行小野君の企画による2回目の遷履志丸会前祝いツアーを行いました。今回は美しい水路の周荘(中国のベニスと言われる)、庭園の美しい蘇州、上海を旅行しました。中国旅行はまるで修学旅行のような感じで、昔は話さなかつた人とも友人となれ、本当に楽しい旅となりました。修学旅行との違いは昼間から紹興酒で乾杯をあげることでしょうか。

中国で仕事を始めた薦森君の業務も順調に軌道にのってきていることも2回の中国旅行が楽しかつた原因となっております。

先回の中国旅行と同様、今回も旅行中の写真をCDに編集し楽しい思い出のアルバムを松田君が精魂こめて作成してくれました。CDのアルバムをめくりながら飲む酒は旅の思い出となっています。本年は大多数の志丸会メンバー



が遷履を迎えるため、お祝いの会は東京支部が幹事となり全国大会を行い親交を深める予定です。

我々団塊の世代は定年を迎えセカンドライフを迎える時期となりました。年金の関係からまだ働かなくてはならない人もいるかもしれませんが、これからも、家族、志丸会を中心に函中時代の友人を大切に、自分の好きなことを行い輝けるセカンドライフを過ごしていきたいと考えております。

第68期・よいよい会 木戸正文 記

毎年、6月の第2土曜日を第68期「よいよい会」の例会の日と決めている。

今回は、渡良瀬渓谷、足尾温泉「かじか荘」での開催だ。入梅宣言の翌日は晴れとのジンクスどおり土曜日はいい天気。

初参加は桜井玉吉君。斉藤義一君が商談で欠席となつた他は、夕方現地集合の「かじか荘」へ全員到着。ゴルフ組の武内君は日焼けでまっかつた。毎年参加している、函館在住の奥野君は1300ccの自動二輪に打ち跨り、青森から陸路を走破して来た由。児玉さんはミネソタからの参加。

早速、露天風呂へ。標高800mの新緑の木々と山々、澄んだ空気に囲まれ、のんびり湯につかる。庚申の湯、別名美肌の湯といわれる。

一風呂浴び、宴会開始、再会を祝してビールで乾杯、カラオケへと続く・・・。
一夜明け、ゴルフ組の車に分乗して、日光方面へ出発。途中、銅



山の坑内観光、足尾歴史館では長井館長の案内で銅山の歴史と明治の近代化への銅山開発技術の貢献等の話を聞く。昼食を輪王寺傍の明治館でとり、日光田母沢御用邸(大正天皇はじめ三代にわたる御用邸、紀州徳川家の江戸中屋敷の一部を移築)を見学。この日は栃木県民の日で館内、駐車場は無料開放。6月のそば降る雨と、そして新緑の木立と御用邸が構成する見事な調和が美しい。

温泉と銅山の歴史、日本建築と自然との調和の美しさを再確認できた2日間であった。

参加は両宮(藤)大河原小澤、児玉(中村)細野塩田(村井)、村上(佐藤)吉野(米)池端、奥野、及能、白崎、桜井(中野)武内君、木戸。以上

第70期・報告

幹事一同記

第70期の同期会は2年ごとに開

催しており、今年はその開催年に当たるので5月20日(土)午後5時から3組の萬矢君が赤坂で経営している中華料理の店「琵琶」にて開催しました。今回は3組の吉田昭二君も札幌より急遽参加して総勢21名。いつもの通りスピーチなしのいきなり乾杯という形式で始まりました。毎回一次会は立食でやっているの、各人が自由に歩き回り、あちらこちらで昔話や近況の報告などしているうちにあっという間に3時間が過ぎてしまいました。8時から同じ赤坂界隈の居酒屋に場所を移して二次会が開催され、出席者のほぼ全員が参加して酒が回ってきたのも手伝って大盛り上がりになり、お店の人にもう時間ですといわれるまで気がつかず10時30分頃に閉会となりました。まだ飲み足りない者たちは三次会へと行ったようです。

第71期・報告

加納元雄記

今年71期大会は、石橋秀樹君の紹介により、初めて都心を離れて横浜の「みなとみらい21」にある「三菱重工横浜ビル」33階のスカイラウンジで、6月17日に開催した。当日は、初参加の神谷(現・四日市)ゆみ子さん、斎藤公良君、高田幸樹君始め29人が参加。梅雨どきのはっきりしない天候であったが、ベイブリッジや横浜港の景観を遙か目の下に眺めながら、卒業以来の経歴、近況等を語り合った。私たちの年代には付き物の、転職、子供の結婚、孫の誕生等々の話題で大いに盛り上がった。

二次会は、村瀬(現・朝日)恵子さんが予約したランドマークタワー内の「シェルバー」。二次会から参加の橋元正君も加わり、二時間貸切り・飲み放題で、美味いカクテルと気の置けない雰囲気、つい飲み過ぎた人もいたようです。

幹事としてはここで開きの積もりが、同じビル内のカラオケボックスまで予約していた陰の幹事長があり、気持ちだけは疲れ知らずの十数人は更に三次会へ。マイク片手に自分の世界に没入する者大音響にもめげず語り尽くせない話の続きを始める者と、ここでも賑やかな会合が続く、結局何人かは電車を乗り逃がした模様。

いくつになっても、どこに行っても、懲りない面々であった。



寄付金のご案内

支部長の巻頭言にもありますように、当支部の財務状態はまだまだひ弱であり、会員の皆様のご寄付は、有り難くお受けいたします。また、評議員会の場合でも、ご高齢の代議員の方から、「現在、80歳以上の会員は年会費が免除となっているが、金額を特定しないで寄付を募ってはどうか」とのご提案を戴きました。

つきましては、お志のある方は下記口座にお振込み戴きますよう、お願い申し上げます。もちろん、金額の多寡は問いません。

【取扱金融機関】郵便局
【口座番号】00190-1-124291
【名称】白楊ヶ丘同窓会東京支部
【振込用紙】郵便局備え付けの用紙(赤色でも青色でも構いません)をご利用下さい。

評議員会報告

日時：4月18日(火)

場所：インターネットロビー

・ルコ出席評議員：33名

以下の議案について審議し、全議案とも承認された。

(1)平成17年度事業報告

(加納副支部長)

親睦大会、会報、HP、会員名簿発行、渉外活動、同好会活動等

(2)平成17年度収支決算報告

(片瀬理事)

大会参加者の増加(174名、207名)、年会費納入者の増加(662名、712名)、運営費の節減等により黒字化達成。

真船監事より監査報告

(3)平成18年度事業計画案

(加納副支部長、小林副支部長)

親睦大会、特別企画「ジャズライブ」の実施、会報、HP、渉外活動、同好会活動等

(4)平成18年度収支予算案

(加納副支部長)

昨年度に引続き赤字化の回避を目指す

(5)役員の変動及び選任

(加納副支部長)

山田評議員(73期)、朝緑評議員(99期の理事就任)

引き続き、同会場において会費制で懇親会を実施。会田雅樹函館市東京事務所長(72期)、西谷康紫同副所長(76期)も参加。

東京支部平成17年度収入実績 および平成18年度予算(単位:円)

	17年度実績	18年度予算	
収入の部	年会費収入	2,136,000	2,300,000
	大会費収入	1,656,000	1,760,000
	その他	185,346	120,000
	合計	3,977,346	4,180,000
支出の部	大会関連費用	1,643,554	1,880,000
	会報関連費用	858,351	859,000
	印刷費	203,700	200,000
	通信運搬費	184,020	184,000
	本部派遣費	226,490	230,000
	事務所諸費	300,000	300,000
	その他	471,410	485,000
合計	3,887,525	4,180,000	
差引収支残	89,821	0	
次期繰越剰余金	4,586,750	4,586,750	



平成17年9月以降の会費の振替用紙のメッセージから

物故者 謹んでご冥福をお祈りいたします。

- 山谷幸之助(31期・昭4年卒)
- 平成17年1月25日没
- 植木正二郎(35期・昭8年卒)
- 平成11年1月没
- 佐々木孝允(35期・昭8年卒)
- 平成16年10月17日没
- 村上 敏夫(35期・昭8年卒)
- 平成16年1月22日没
- 小西 繁男(39期・昭12年卒)
- 平成17年2月21日没
- 三角 俊登(39期・昭12年卒)
- 平成17年3月6日没
- 玉本 一郎(40期・昭13年卒)
- 平成17年1月5日没
- 井上 道郎(46期・昭19年卒)
- 平成18年1月14日没
- 北川 敏雄(46期・昭19年卒)
- 平成17年12月16日没
- 及川 博(49・50期・昭21・22年卒)
- 平成17年1月9日没
- 平塚喜三夫(昭和23・24年・51期卒)
- 平成17年8月21日没
- 俣野 一郎(昭和23・24年・51期卒)
- 平成18年3月19日没
- 石田 端(52期・昭25年卒)
- 平成16年2月25日没
- 袖山 智也(52期・昭25年卒)

- 平成17年8月16日没
- 手塚 一世(52期・昭25年卒)
- 平成16年6月15日没
- 中村 勝哉(52期・昭25年卒)
- 平成17年11月6日没
- 吉見 義衛(52期・昭25年卒)
- 平成16年11月5日没
- 池田 正文(53期・昭26年卒)
- 平成17年8月8日没
- 斎藤 道一(53期・昭26年卒)
- 平成16年5月6日没
- 春木 利明教諭
- (昭和18年4月)42年3月在職)
- 平成17年11月没

浅野 辰雄(35期・昭8年卒) 入院中です。よろしく。

松丸 秀夫(35期・昭8年卒) 以前は東京支部親睦会に出席していましたが、顔見知りの人が減って出なくなっています。前回の出席者リストに同期の佐藤洋君の名を見付けて、「偉い!!」と叫びました。函館は懐かしい所です。

加藤 敏雄(35期・昭8年卒) 本年2月に老妻逝去。卒寿を過ぎ老衰が進み、長男一家の介護を受けて何とか消光しておる昨今です。

松原 竹造(36期・昭9年卒) 生憎と先約があり残念です。ご盛会を祈る。

風間 憲吉(37期・昭10年卒) 毎年秋原先生をお招きして十楊会を開催しております。高齢のため今回勝手乍ら欠席とさせて頂きます。益々の御発展を祈ります。

西原林之助(38期・昭11年卒) ご無沙汰しております。外出は出来なくなりましたが、元気に過ごしております。担当の皆様ご苦

勞様です。

河村 泰平(39期・昭12年卒) 昨年11月頸部リンパ腫「化学治療」を受け、本年2月末末全治退院。この間昨12月妻が入院中心不全により永眠。「化学治療」とは、リツキサン及びC H O P 4種抗ガン剤混用にて静脈血管への点滴。同病の方の完治を祈っております。将来的にP Cを考慮中です。

楢田 和彦(39期・昭12年卒) 東京白楊だより御恵賜頂き誠にありがとうございました。拝読させて頂き、一人函館が恋しくなりました。39期で下関在住の三角俊登君が今年亡くなりました。一昨年旅行の途次お会いした時はお元気でした。私も神戸市灘区医師会で現役の最年長になりました。下手な俳句ですが、

豊かなる白砂失せて啄木忌
前田 徳尚(39期・昭12年卒) 病気がちですが老後を楽しんでおります。

前田 季邦(40期・昭13年卒) 体調悪く外出が無理となりました

今井 清(40期・昭13年卒) 東京白楊だより第28号懐しく拝見しております。母校函中が110周年を迎えることは大変喜ばしく、ますますの発展を祈念いたします。

室谷 国男(40期・昭13年卒) 今年体調不良で長時間の外出が出来ませんので失礼致します。

外山源一郎(40期・昭13年卒) 大会のご盛会を祈念します。

安富 隼平(42期・昭15年卒) 19期大正6年卒の渡辺忠雄先輩は105歳。私は大正12年生れ81歳。遙かな山頂を仰ぎ見えています。

田沼 修一(45期・昭18年卒) 6月25日(土)翠楊会(18年卒同期会)を青山山荘で開催、20名が参会した。

池上謹之助(45期・昭18年卒) 極書の連続の中頑張っている幹事の皆さんご苦労さまです。さて来年もお世話になります。よろしく。

山田 宗允(47期・昭20年卒) 私達が函中を卒業してから60年経ちました。まことになつかしいです。函館中学は明るく、当時としては自由な気風で、よい中学でした。

浜中 孝平(48期・昭21年卒) 老夫婦とも病弱(家内は身体障害者、小生は胃ガン療養中)にて、同窓会行事等に参加することが出来ませんので、今後ご連絡等一切無用に願ひ上げます。

柴田 啓次(51期・昭23・24年卒) 第28期の会員短信の小野寺君の意見に同感。

角谷 八朗(53期・昭26年卒) 28号の特集・随想大変興味深く読ませて頂きました。函中らしさが滲み出て懐かしかったです。

入江 宏子(54期・昭27年卒) いつも有難う存じます。

戸崎 正敏(54期・昭27年卒) 都合により出席できません。ご連絡せず申し訳ありません。

高木 幸子(55期・昭28年卒) 会報を有りがとうございます。大正時代の函館港の賑わいぶりから、亡き父の若い日の姿が推察され、懐かしい思いで読ませていただきました。

森 康美(55期・昭28年卒) 会報楽しくなつかしく拝見します。各号テーマにそって充実し

るので保存しています。よろしくお願ひいたします。

塚本 弘子(56期・昭29年卒) 私達の期も40代の頃同窓会のお手伝いをしたことがありましたが、今若い期の方達ががんばっておられ嬉しく思っております。イベントのフルートの演奏楽しみに参加させて頂きます。

藤本 一郎(56期・昭29年卒) 古希を迎えやつと仕事、会社を卒業出来ました。残余の時間ゆつくりと新しい希望を持って生きていたいと思っております。よろしく。

黒川 怜子(56期・昭29年卒) 終身年会費を考えてみてはいかがですか。

寺田 姉生(57期・昭30年卒) いつもお世話になります。

隈井 薫(57期・昭30年卒) いつもお世話様です。よろしくお願ひ致します。

村嶋 泰子(57期・昭30年卒) 暑い日が続く折、お世話下さいましてありがとうございます。

加藤 秀一(57期・昭30年卒) 昨年末に仙台市に転居いたしました。杜の都での生活にもようやく慣れたところです。卒業50周年古稀の祝いで10月には3年ぶりに函館を訪れる予定です。

信太 延一(57期・昭30年卒) 支部活動に感謝しています。特に会報は毎回読みこたえがあり、改めてふるさとの良さを感じさせてくれます。ますますのご発展を、

堀江 郁子(57期・昭30年卒) 白楊だよりありがとうございます。谷地頭の方に四角い電信柱があるそうですがご存知ですか。

東京白楊だより

多和田 収(57期・昭30年卒)
残暑御見舞申上げます。皆様の
益々のご健康をお祈り申し上げま
す。

小竹 嘉子(57期・昭30年卒)
会報は毎回実りある内容で楽し
く拝見しています。実は校章の入
った日本手拭いがあります。一年
生の時作ったものだど記憶して
おりますが、キルトにして保存し
よつかと思っております。

吉田 精吾(57期・昭30年卒)
今年古稀を迎え、昨年10月には
函館で今年5月には東京で、それ
ぞれ記念の同期会を開催したが、
いずれも盛況。老いてますます盛
んといったところだ。

山本 哲也(58期・昭31年卒)
引退後ゆくりり過しております。
唐沢フミ子(58期・昭31年卒)
東京白楊だよりなつかしい想
いで拝見いたしました。どうもあ
りがとうございました。

古川 セツ(59期・昭32年卒)
長兄大島浩(札幌在住)次兄大島
隆(伊豆在住)、義兄古川洋太郎(仙
台在住)皆元気にしております。

八木 英子(59期・昭32年卒)
「東京白楊だより」お送り下さ
いましてありがとうございます。い
つも楽しみに拝読しております。

武田 至正(60期・昭33年卒)
適度な緊張時間(仕事)を持ち、
残りは楽しく有意義に日々を送
っております。会報楽しく読んで
おります。感謝。

岩淵 安隆(60期・昭33年卒)
自宅の週末、庭木の手入れの延
長から定年後始めた植木職人も足
かけ7年、あと数年は植木屋と山

歩きでいけそつです。

岩崎 英子(60期・昭33年卒)
ご苦労さまです。これからもよ
ろしくお願い致します。

佐々木孝吉(60期・昭33年卒)
まだ現役で頑張っております。
中角 久典(60期・昭33年卒)
古里は遠くにありて思うものと
か。郷里から遥かはなれた九州
の土地で四つの大学、専門学校
の学生相手に元気でやっております。

伊藤 紀子(60期・昭33年卒)
東京白楊だより読ませていただき
ました。ありがとうございます。
8月函館へ駆け足で訪れたら、
新しい五稜郭タワーが完成間近で
2倍位の高さでした。函館の発展
を祈っております。

福井 利恵(61期・昭34年卒)
過日知床へ行って来ましたの
で、三上さん(同期)の「語りつ
く北方四島」興味深く拝見しまし
た。支部の益々のご発展を祈り上
げます。

遠藤 隆三(62期・昭35年卒)
残念ながら親しくしていた友人
の消息がつかめません。小生はパ
ーティに入部しております。西
館、阿部(主将)、笠原君等の
所在が分かりましたら教えて頂き
たいと思います。

市丸 大平(62期・昭35年卒)
小学生の頃七飯(七飯小学校卒
です)でおぼえた魚つり(久根別
川)は今まで続いています。場所
は利根川水系の小川です。「すず
め百まで踊りを忘れず」とは正に
このことです。

竹田 幸一(62期・昭35年卒)
毎回白楊だよりを楽しみに読ま

せて頂いております。

鎌形 寛子(62期・昭35年卒)
幹事の方々にいつもありがとうございます。
させていただきます。会報楽しみにしてあり
ます。

石崎 篤子(63期・昭36年卒)
函館中部高校創立110周年おめで
たうございます。
嶋津 公男(63期・昭36年卒)
定年後早や2年、のんびりとし
た日々を送っております。今秋は函
館での同期会に参加予定です。

中村 良誠(63期・昭36年卒)
幹事の皆様へ、いつも大変お世話
になっております。お手数をおかけ
しますが宜しくお願い致します。
浜岡興一郎(63期・昭36年卒)
今年63歳になりましたが現役
で、5月以降毎月一度の韓国出張
をこなし、技術開発を扱っており
ます。

杉沢 雅(63期・昭36年卒)
いつも会報を楽しみにしてあり
ますが、会費の払込がとどこおり
がちで申訳ございません。気をつ
けます。

長尾 保秀(64期・昭37年卒)
東京でまた一年仕事することに
なりました。「倦ます、弛ます、頑張
らず」でいきたいと思っております。
戸田 りつ(66期・昭39年卒)
幹事の方々に頑張っていたいて
ありがとうございます。これから
もよろしくお願い致します。出席
のチャンスをおねらっています。

中川 真(67期・昭40年卒)
東京白楊だよりいつも楽しく読
ませていただいております。役員
幹事の方々に感謝申し上げます。
越中谷庸三(68期・昭41年卒)

同期会報告を楽しく読ませて頂
きました。

細野 ナツ(68期・昭41年卒)
仕事にて出席出来ず残念です。
東京支部の発展を願っています。

丸山 隆(68期・昭41年卒)
昨年もヨーロッパへ出かけてお
りましたが、今年もまたドイツへ
出かけておりましたため出席でき
ませんでした。
大久保節子(69期・昭42年卒)
いつもありがとうございます。

奥野 政博(69期・昭42年卒)
H13.7からH17.2まで札幌に
転動していましたが、再び千葉
(勤務地東京港区)に戻ってきました。
岩切 省三(69期・昭42年卒)
御世話の程感謝申し上げます。

園 蘭美(69期・昭42年卒)
東京白楊だよりありがとうございます。
皆さまの想いにいつも感謝
しております。

小坂 繁(70期・昭43年卒)
後一年半トルコ生活の予定です。
板垣 裕則(70期・昭43年卒)
団塊の世代も少々くたびれてき
ました。個人的には、
片岡 進(71期・昭44年卒)
2005年9月1日から私の活
動拠点を名古屋に移します。

目黒 容子(71期・昭44年卒)
いつもご連絡ありがとうございます。
同窓会幹事様のご苦労に感
謝いたしております。
川村 哲雄(71期・昭44年卒)
平成17年度第71期同期会を6月

18日(土)午後5時からホテルニ
ューオータニ・カンシップで開
催しました。参加者は一次会と二
次会合わせて34名。一次会からの
函館から出席の柴田先生、二次会
からは水江先生も参加。お元氣な
両先生とともに18名が三次会に残
り、延々6時間余の宴でした。

安彦 敏郎(71期・昭44年卒)
会報ありがとうございます。
中村 興治(71期・昭44年卒)
今年7月所用のため帰函。合間
にすっかり整備された倉庫街で家
内と買物デート。熟年夫婦対策に
お勧めします。

吉田 眞紀(72期・昭45年卒)
同期の幹事さんからお便りと
会報をいつも楽しみに拝見してい
ます。
花甲 泰三(75期・昭48年卒)
幹事の皆様にはお世話になりま
す。当会の益々の発展を願ってい
ます。

浜田ひとみ(75期・昭48年卒)
いつも会報ありがとうございます。
黒岡富久子(80期・昭53年卒)
懐かしさだけでなく函館を再発
見できる会報をいつも有難く拝読
致しております。会の維持運営に
ご尽力下さっている皆様には、こ
苦勞を察しつつ、同窓の絆を繋い
で頂いていることに大きな感謝の
意を表したいと思います。

野澤 雅美(84期・昭57年卒)
夫の転勤で横浜に引越しまし
た。白楊だよりいつもありがとうございます。
関村 恒世(85期・昭58年卒)
事務局の皆様いつも本当にあり
がとうございます。

連盟の会長職は平成15(2003)年まで7期14年務めた。前任の大山さんは12年だったから、私が2年上回ったことになる。あちらはお亡くなりになったので、もう追い抜かれることはない。つまらない意地を張るようだが、最後によく勝てた。(中略)

私は、人生は腹八分目でいいと割り切ってきた。えらく威勢の悪い信条である。めいっばい頑張りすぎず、その代わり、願いが八割ぐらいしかかなわなくても、がっかりしなかった。

若いころは「だからおまえはダメなんだ」と先輩にしかられた。この年まで生きてみると、だからこそ、長く将棋にかかわってこられたのだと思う。あっさりした面としつこい面の両方が私の中にはある。そして、人生の節目では運に恵まれた。(中略)

残りの人生、とりあえず盤寿、81歳までは元気に暮らしてこの世と将棋界の行く末を見守ってあげたいと願う。あくまで傍観者として、人さまに迷惑をかけないように。

書名「棋を楽しみて老いるを知らず」
発行 東京新聞出版局
定価 1,500円+税



二上達也氏棋歴

1932(昭和7)年、函館市生まれ。父親の手ほどきで将棋を始め、17歳でアマ名人戦北海道代表となる。函中を卒業後、渡辺東一名誉九段に入門、わずか6年で八段へ昇段。当時、大山康晴十五世名人に挑み続け、二度タイトルを奪った。73年九段となる。90年引退。A級在位通算27年、タイトル獲得は、王将1期、棋聖4期。89年から14年間、日本将棋連盟会長を務める。羽生善治氏は弟子の一人。

白楊ヶ丘同窓会東京支部設立30周年記念
第2回ポプラ会グループ展

白楊ヶ丘同窓会東京支部における親睦交流と同窓会の活性化を目的とし、本部、支部を問わず創作活動をされている同窓生の作品を展示し、希望者には頒布をする絵画他の作品展。

日時 平成18年9月28日(木)~10月4日(水)
11時~19時(最終日16時)

場所 ギャラリーコンセプト21
東京都港区北青山3-15-16

オープニングパーティ 28日(木) 17時~19時
多数のご参加をお待ちしています。

出展参加申し込みを受け付けております。奮ってご参加下さい。

申し込み先

白楊ヶ丘同窓会東京支部副支部長・63期 小林 嘉則
〒154-0002 世田谷区下馬4-17-17
TEL : 03-3411-1241 FAX : 03-3424-6854
携帯 : 090-1818-8129 メール : y-koba@bc.ij4u.or.jp



第25回・11月11日・浦和GC

白楊ヶ丘同窓会東京支部ゴルフ会「第25回・26回ポプラ会」報告
理事 菅原大作(65期)
白楊ヶ丘同窓会東京支部会員のゴルフ愛好者のコンペ「ポプラ会」は、年2回のプレーを続け、今年で13年を経過した。本年度も11月と5月の2回開催された。
第25回は、平成17年11月11日、埼玉県の浦和ゴルフ倶楽部で、6組22人が参加して行われた。この日は終日曇りがちの天候で、かつ多少気温が低かったものの、これまでのポプラ会コンペは毎回雨天や強風下でのプレーが多かったことと比べれば珍しいほどの好天(?)のもとで熱戦が行われた。
成績は、57期の奥村良子さんがハンデ29を生かして初優勝した。第2位は61期・長尾邦充氏、第3位は61期・水嶋紀子さんが女性ベスグロ(48・49)で入賞した。男性ベスグロは、42・41の同スコア



第26回・5月12日・浦和GC

成績は、61期・水嶋紀子さんが46・44の好スコアで初優勝した。2位は60期・紅谷弘一氏、3位は63期・中村 崇氏。ベスグロは、44・44で前回に引き続き69期・佐々逸雄氏、シニアは48・45で60期・水江彰一氏がそれぞれ獲得された。
なお、次回(27回)のポプラ会は、11月17日(金)の開催を予定しております。コンペの案内状をご希望の方は、下記までご連絡ください。

第10回 三校対抗函館巴会
ポプラ会コンペとは別に、平成9年から開催されている函館西、東両校と中部の3校同窓会の関東地区支部で行っている「函館巴会」コンペが、平成18年4月13日、中部が幹事当番校として茨城県の常陽カントリー倶楽部で、西校12人、東校11人、中部13人の10組計36人が参加して行われた。
成績は、個人が東校の福田道義氏。団体は、西校と中部が同ポイントで両校の同時優勝となったが、幹事当番校の独断で、西校に優勝を譲った。
なお、平成19年開催の今回は、東校が幹事当番校として実施されることになっている。



第10回 函館巴会参加メンバー

ポプラ会申込み先
FAX: 03 3424 6854
63期・小林嘉則 宛

白楊ヶ丘同窓会東京支部設立30周年
第30回親睦大会案内

2006年9月30日(土) 午後2時00分～

懇親会・開会：午後2時00分～5時30分

演奏会：一部 午後2時45分～3時30分／二部 午後4時00分～4時30分

音 音 (平成9年卒・99期)

1978年、函館市に生まれる。
 函館中部高校を卒業後、ニューヨーク市立大学へ入学。在学中には、ゴスペル、R&B、オリジナルを中心に演奏活動し、アポロシアター、ブルーノートなどに出演した。2003年帰国。現在は東京を拠点にジャズ、ソウル等のライブ活動を精力的に行っている。2004年ジャズディ記念フレッシュボーカルナイトでグランプリを受賞。ファーストアルバム“ONE”発売中。
 (ホームページURL：www.nenezo370.com)



加茂 紀子 (昭和49年卒・76期)

1956年、函館市に生まれる。
 幼少の頃より母からピアノの手ほどきを受け、北海道教育大学付属小・中学校・函館中部高校を経て、上京。明治学院大学英米文学科卒業後、ジャズ・ミュージック・スクールにてピアノを専攻。10年間のプロ活動の後、ニューヨークへ活動の場を移し、現在「コットン・クラブ」のハウス・ピアニストとして活躍する。
 2005年1月、158代はこだて観光大使に任命された。

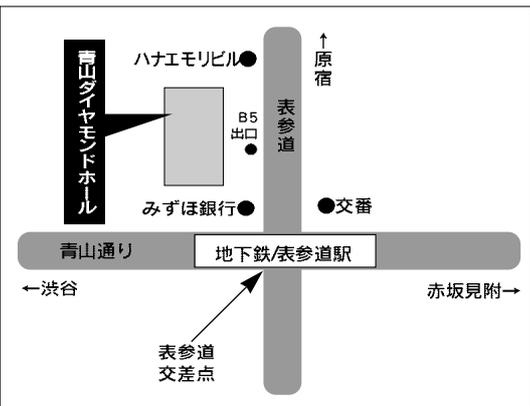


音音です

皆さん、初めまして、音音と申します。1997年に函館を卒業しましたので、かれこれ10年経ちました。昨年土砂降りの雨の中、初めて同窓会に参加して、先輩の方々とお話しさせていただき、私歌を歌ってみたいです。『えっ、何音音を持って来ないです』って言ったのですが、アカペラでアピールくらい出来なくちゃあ、みたいなことになって、舞台上上がることになりました。高校生の時からゴスペルをやってましたので、伴奏はなくても歌えるのですが、さすがに急な出番でしたので、結構深呼吸なんかしてしまいました。幸い諸先輩の皆さんにたくさん拍手をもらいすっかり親睦会に溶け込むことが出来ました。その節は本当にありがとうございました。お陰様で皆さんに覚えていただきました。

ていただき、ライブにも来ていただいたり、そして今年の親睦会では加茂紀子先輩と演奏会まで企画してもらい、とても嬉しいです。加茂先輩とは今回初めて一緒にさせてもらうのですが、ニューヨークで20年もピアノを弾いている方ですので、楽しみと同時に今から緊張しています。私も高校を卒業してすぐにニューヨークに歌の勉強に行き、6年間生活しましたので、あの街の空気を感ぜられるように歌えたらと思っています。どんなセッションになるか、皆さんも期待してください。今回の他の演奏メンバーはベース 北川秀生さん、東京都出身、1986年渡米。ニューヨークに居住。加茂紀子と数々の共演。現在一時帰国中。ドラムス 植松良高さん、東京都出身、1977年渡米。ニューヨークに居住。加茂紀子とは今回初共演。現在一時帰国中。

青山ダイヤモンドホール ご案内



◆青山ダイヤモンドホール◆

〒107-0061 東京都港区北青山3-6-8
 電話：03-5467-2111

- 地下鉄／銀座線・半蔵門線・千代田線表参道駅 B5出口直結
- JR山手線／原宿駅下車・徒歩10分
- ※駐車場(有料)には限りがございますので、なるべく公共の交通機関をご利用下さい。

——編集後記——
 今年は同窓会東京支部が設立されて30年になりました。旧制中学の諸先輩の御苦労を引き継いだ積もりではありませんが、最近の若返りと様変わりにはどのような感想をお持ちでしょうか。昔は講演会がイベントの目玉でしたが、このところ音楽会が多くそれが育つ土壌があるのかも知れません。昨年はクラシックでしたが、今回はジャズになりました。御年配の方には取っ付き難いと思われるところがあるようですが、特集に取り上げた加茂紀子ニューヨーク物語、はいかがでしたか。女性が一人で世界一の大会で音楽の武者修行に挑む姿は函中スピリット、白楊魂そのものに感じました。ジャズの現場で鍛えられ、さらにチャレンジャーにいる加茂紀子。そして同じニューヨークでゴスペルソングに磨きをかけ、帰国して3年目の音音のバワは昨年の大会で飛び入りして御披露目済みです。この二人の初共演を実現させてくれた今回担当の76期生達が多様な大会にしてくれるのかとても楽しみです。 編集 K

東京白楊だより 29号

- 発行 白楊ヶ丘同窓会東京支部
- 発行人 金子 公彦 (61期)
- 編集責任 小林 嘉則 (63期)
- 発行日 平成18年8月1日
- 【東京事務所】
 〒160-0022
 東京都新宿区新宿
 1-13-8-302

TEL: 03-3335-2162
 FAX: 03-3341-5048